
蛻の殻

村雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蛻の殻

【Nコード】

N5289K

【作者名】

村雲

【あらすじ】

出来れば愛して、好きなら殺して。

官能の時を探していた

名ばかりの真偽が

粘膜を貫かれた蛇に似てるように

ただそこに在る殺意が

否めない色欲に苛まれた

不動の体裁を

虫籠に飾り付けて

悲哀を冠して

僕らは出会う

それを知る由もないのは

必然すら必要とされない

夥しい偶然と忘却の連続

時には運命なんかといわれるものが

僕らを第三の感覚に陥れる

痛みだけが

なんとなく

僕らを近づける

当て所なく続く今日という日は

ここでなら生きていける、と

理解を促し

例えば愛に似たそれと

柔らかな狂気を飼い慣らす

渴望して進む白は

また当て所ない今日という日を

当然知る由もなく

第三の浅い夢に一瞬の官能を知る

痛覚を刺して貫き

吐息は耳を劈きながら

垂れる涎に声を滲ませる

血潮を嘗めて背骨に触れる

そんな時だけ体たらくな灼熱が

僕らを繋ぐ

互いの汗が混ざるのを感じて

少し吐き気がするのがわかる

それと同時に

蛇は白濁の毒を撒いて

第三の瞼を閉じてしまう

二つの脈が心地好くて

ほら、

まだ僕らは震えてる

知ってるはずだよ

温もりの延長線上にある何かを

畏れて

いつか

殺してしまいたい程の官能の悦びを知る

互いの首に牙を突き立て

湿った皮膚を

赤で飾るんだ

僕らはいつだって独りきり

無駄に粘膜を重ね合って

浅い痛みを分かち合っても

虫籠から這い出た葉虫は

自由を知った途端に

蛇の毒牙に心奪われ

いつまでも爪は幼く

乾いた瞼に映る第三の正気

そしてただそこに在る殺意が

否めない色欲に苛まれた

でも、まだ、僕らは

その為に溢れ出る涙さえ

掬っては笑って唾を吐く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5289k/>

蛻の殻

2010年10月28日04時25分発行